

## 平成 29 年度 第 1 回 富山県公共事業評価委員会の概要

1 日 時 平成 29 年 8 月 9 日(水) 10:00~12:00

2 場 所 県庁4階大会議室

3 出席者 中村委員(会長)、野尻委員、伊藤委員、上坂委員、小泉委員、東出委員、眞岸委員

4 審議内容(重点審議対象箇所について、パワーポイントで説明)

【土木部事業】(水口次長) 重点審議対象5件

【農林水産部事業】(清水次長) 重点審議対象1件

### 【土木部説明に対する主な意見】

#### ○国道 4 1 5 号谷屋大野バイパス

(委員)

- ・橋梁の老朽化の現状を踏まえると、無理に橋梁を作ってはいけない。橋梁を土工形式に変えたのは、コスト縮減、ランニングコストを下げるという面で良い取り組みである。

#### ○常願寺川水系和田川(砂防)

(委員)

- ・和田川の B/C(費用便益)の評価について、下流域の既存砂防堰堤をどのように評価し B(便益)を算定しているのか。下流域を含めて全体的に考えた場合、下流域の既存砂防堰堤を有効利用していく方が費用を縮減し、持続可能とするためにも必要である。
- ⇒・豪雨等により土石流が発生した場合に、今回整備する堰堤が単独で機能するように計画されている。下流域の堰堤もそれぞれ土砂を溜める機能を持っているが、小見地区や和田地区に土石流が到達する恐れがあることから、今回の堰堤により被害を緩和するものである。
- ・既存の整備済みの堰堤が受け持つ不安定な土砂と今回整備する堰堤により抑え込まれる不安定な土砂がある。その不安定土砂の全体に占めるシェアを割り返すと、今回の堰堤の持ち分は全体の 5%であり、カバーする分の 5%を今回の事業の便益として計上している。
- ・既存砂防堰堤に溜まった土砂を掘削し堆積スペースを確保するなど、既存施設の有効活用にも取り組んでいる。また、不透過型の堰堤を透過型にするなど、既設堰堤の効果をさらに高めるといった方法も展開している。

(委員)

- ・今後も上流部に堰堤を作っていくのか。
- ⇒・今回の堰堤を整備した上で、社会経済情勢の変化や既存の堰堤も含めた実際の土砂の堆積状況等を踏まえ判断する。

(委員)

- ・個々の事業単体で費用便益を出すことも大事であるが、一方で、例えば河川の場合は、水系全体での費用便益というものを考えた上で、全体計画を立てることも大切であり、今後検討してもらいたい。

## ○頭川地区、諏訪町地区（砂防）

(委員)

- ・地すべりが起きる一つの原因として山の植生の問題があると考えますが、山の植生と地すべりとの関連をどのように考えているのか。
- ⇒・地すべりの対象区域を設定する場合には、航空写真や地形図であたりを付けた後、現地踏査を行っているが、現地の植生は地すべりを判定するためには非常に重要な要素であり、現地踏査の時に把握している。
- ・しかしながら、技術的に「人工林であればどうである」とか「自然林であればどうである」というように、人工林か自然林かを工法選定に反映するには限界がある。
  - ・発生源の森林をしっかり整備すること、間伐を行い健全な林を整備することで、災害は発生しにくいと考える。
  - ・九州北部の場合は、林野庁で原因を解明中であるが、地すべりの発生と人工林との因果関係は明確ではない。地すべりは地下水位が一番大きな問題で、地面でも深い部分がゆっくり移動するものであるが、崩壊・瞬時に崩れる場合は比較的浅い部分と考えられ、植生による影響がある程度出ると考える。

(委員)

- ・一歩進んで、植生そのものを変えるという考えもあることを、難しいのかもしれないが、考え方のひとつとして留め置いてもらいたい。

## ○砂防関係

(委員)

- ・九州で大きな災害があり、地すべりで木が流れて、堰堤を乗り越えたという話もあるが、流木対策をどのように考えているのか。
- ⇒・砂防堰堤は、土砂の抑制のほかに、上流域から流れてくる流木を補足することも目的としている。砂防堰堤により、特にスリット型では大きな礫をここで止め、流木もここで止めることができ、効果は大きい。
- ・ダム湖、貯水池にも雨が降れば沢山の流木が溜まるが、ダムの堰堤を超えて下流に流れていかなないように、流木を捕捉している。

(委員)

- ・災害を事前に想定した上で、不透過型の砂防堰堤の高さが決まるものだと思うが、実際に想定を超えた災害が色々と発生しているが、見直し等はどのように考えているか。
- ⇒・50年に1度、100年に1度などを想定して整備するが、砂防関係で言うと、計画の整備

率は約 34%であり、着実に整備を進めているが、投資できる事業費にも限りがある中で、「どういうふうに高めていくのか」ということになる。

- ・ハード整備で防ぐことができる災害もあるが、それを超える災害が起きうることを想定しないとイケない。その点は、ハザードマップの周知や避難の対応などのソフト面の対策を、ハード整備と併せて進めることで住民を守っていくものと考えている。

(委員)

- ・ソフトとハード両面の対策、あるいは、新しいものを作るだけでなく既存の施設をいかに維持管理していくかということに、今後も注意深い気配りが必要であり、引き続き、この点を留意しながら進めてもらいたい。

(委員)

- ・砂防事業の土砂を（事業箇所の）近くで埋立てすることもあると思うが、その土砂が流れ出るかもしれない。今の時代、異常気象で想定外なことも起こっているが、どのように考えているのか。
- ⇒・河川ではダムで洪水調節をしており、大雨時には水を貯めることにより下流域における治水効果を確保している。ダムの場合、一定の堆砂容量を計画に見込んでいるが、溜まった土砂を外へ出して、洪水調節容量を一定以上確保できるようにしている。
- ・土砂を何処へ持っていくかは、例えば、工業用地の造成や、他の公共工事に流用するが、民地を借りてそこにある程度盛土をし、仮置きすることが現実にはある。土砂が大雨で流れないような対策も念頭において仮置きの土地の確保に努めたい。

## 【農林水産部説明に対する主な意見】

### ○森林整備関係

(委員)

- ・間伐した材料を搬出して有効利用しているが、色々な条件で経済的にペイできないことから山中に積む場合もあるのではないかと。想定外の豪雨で、流れ出る可能性もあるが、どのように考えているのか。
- ⇒・林内に放置すれば、豪雨などにより下流に出れば災害となることから、県としては、搬出に対してもしっかり支援を行っている。
- ・一昨年に北陸初の木質バイオマス発電施設ができたが、建築材にならないものも、再生可能エネルギーとして有効活用に取り組んでおり、この施設のおかげでかなり林内に放置されるものが無くなったと考えている。

(委員)

- ・物質循環全体として捉えることで、個々の事業を超えた形で考えてもらえればと思う。

(委員)

- ・林道の役割の中で、森林レクリエーションの利用ということがあるが、観光などとの連携で林道を活用するということはあるのか。

⇒・有峰林道では、有峰の豊かな自然を活用するということで、有峰森林文化村を活用している。有峰ハウスという宿泊施設も整備しており、2車線で全て舗装し平成31年までに全線開通し、多くの方に薬師岳や折立、有峰湖周辺の自然を活用してもらいたいと考えている。現在も有峰森林文化村活動で、地域の公民館活動や学校の活動で自然体験の機会を提供している。

## ○庄西1期地区

(委員)

- ・小水力発電の管路を仮回し水路として使うというのは面白いアイデアだが、どのような調整事項に時間がかかったのか。また、事業の進捗について、事業量のほうが事業費に比べて大幅に進んでいるがなぜか。

⇒・1点目について、小水力発電は、地元の土地改良区が事業主体となって小水力発電を整備するということで、発電所の位置や、関係機関の道路・上水道等との調整に時間がかかった。

- ・2点目について、(今後整備する)小水力発電の用水、庄西幹線などは非常に断面が大きく事業費がかかるが、協議があまり必要のなかった小さい断面については、事業費がかからなくても延長が確保できたため、非常に進捗している。

## 【全体を通してのコメント】

(委員)

- ・コスト縮減も大切だが、事業実施に伴う環境への影響はどうなのかと気になる。例えば、地すべり対策でも3つの工法の選択肢があるなか、コスト比較+αで環境的にはこの工法が良いなどという視点も大切である。

(委員)

- ・昨今の他県の状況を見ると、非常に災害規模が大きく、一度起きたら大変だと県民は不安に思っているが、予算は湯水のごとくあるわけでないので、効果的、重点的に進めることが一番だと考える。今後ともコスト削減も大事だが、できるだけ早期完成を目指していただきたい。